

釜石の歴史

よもやま話

12

歴史のさんぽみち編

(5)

問い合わせ
市文化振興課 27-5714

釜石に眠る遺跡

古代編

古代とは古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代をひとくくりにした通称です。釜石市は古代に属する時代の遺跡数が少なく、中でも古墳時代から飛鳥時代の遺跡は未発見です。

市内唯一の古墳時代の遺物

市内では古墳時代の遺跡は発見されていませんが、この時代に釜石に人がいた痕跡は残っています。平成3年に石應禪寺裏遺跡の分布調査で古墳時代の須恵器の坏蓋が発見されています。坏蓋とは扁平な皿状の器を重ねて使用した独特な器です。須恵器はロクロで作られ、穴窯で焼く大陸から伝えられた技術による焼き物です。当時の最先端技術で焼かれたこの器は、釜石周辺ではなく近畿地方で焼かれた搬入品であると考えられています。この小さな欠片の存在が、今後市内で古墳時代の遺跡が発見される可能性を示しています。

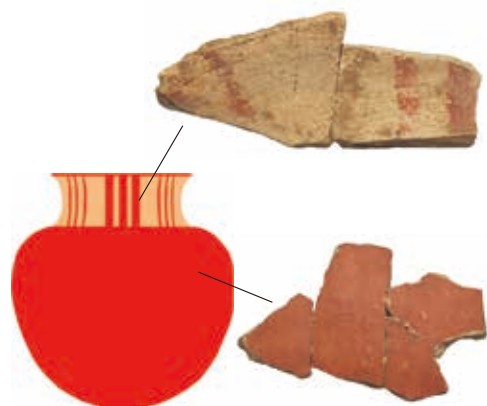


石應禪寺裏遺跡表採 5世紀の坏蓋

平安時代の赤い甕

縄文時代のものに比べて数は多くありませんが、市内各地で平安時代の集落跡が見つかります。その中でも、鶴住居町の麓山遺跡から出土した赤彩球胴甕の欠片について紹介します。

平安時代には土師器と呼ばれる素焼きの土器が用いられますが、この赤彩球胴甕はその名の通り、赤い色が塗られ、丸い形をしています。8〜9世紀の限られた時期にのみ用いられた祭祀用の特殊土器で、北上川の支流、和賀川周辺で局地的に出土します。出土数自体が少ないこの土器が、なぜか釜石市内から出土したのです。当時の儀礼にかかわる文化が、沿岸部にも広がっていたことが分かるだけでなく、当時の海上交通の可能性を示す貴重な資料として重要視されています。



赤彩球胴甕模式図と麓山遺跡の赤彩球胴甕

市指定文化財

「女遊部のトチノキ」

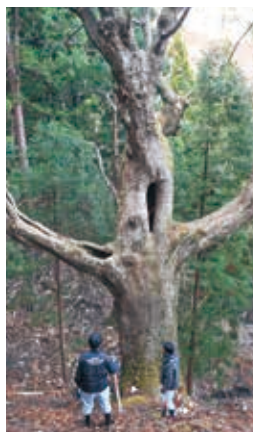
「鮭供養碑」

釜石市文化財保護審議会（川原清文会長）では、市内に残る貴重な文化財の調査を行っています。

今回は、調査の中でその希少性が確認され、新しく市指定となった文化財を紹介します。

天然記念物「女遊部のトチノキ」

樹齢約300年と考えられるトチノキの老巨木で、両石町第4地割女遊部の山中奥深く、ソバクサ沢（枯沢）から尾根に向かう急峻な斜面に生育しています。その大きさは樹高約15〜20メートル、樹周は目通り約4・75メートル、根周り約5・1メートルとなります。トチノキ周辺の樹木は伐採され、植林地として開墾されました。この老巨木は地域の皆さんによって大切に見守られ、現在もその樹勢を保っています。県内でもトチノキの巨木は少なく、市内では大変珍しいことから、令和3年3月25日に市指定の天然記念物となりました。



女遊部のトチノキ

有形文化財「鮭供養碑」

鮭供養碑はトド漁が盛んだった両石村にトドの供養のため、安政5（1858）年3月に建立されました。両石では江戸時代から明治29年の三陸大海嘯（津波）の頃までトド漁が行われており、貴重な収入源となっていました。石碑は現在、国道45号沿いに所在しますが、古くは浜街道（海辺道）沿いにあったそうです。鮭供養碑は釜石のみならず三陸沿岸部においてトド漁を伝える唯一の碑であり、地域の共同作業により地域経済の発展に寄与したトド漁の歴史を伝える上で、大変貴重であることから、令和3年3月25日に市指定の有形文化財となりました。なお、縄文時代中期末〜後期初頭（紀元前1800〜紀元前2000年）にかけての国史跡屋形遺跡の貝塚からはトドの第1中手骨が見つかったり、釜石の一番古いトドの痕跡となっています。

文化財は歴史を伝える貴重な存在です。大切に守り伝えましょう。



鮭供養碑

